

高尾哲史 提出学位申請論文（課程博士）

『前田利長と越中高岡の神祇信仰』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、序章・第一章「高岡城」・第二章「高岡稻荷大明神」・第三章「高岡御車山祭」・第四章「御車山祭と豊臣政権」・第五章「二上山麓の築山神事」・第六章「菩提寺と廟所守護寺院の鎮守稻荷」・終章「総括」から構成されている。

第一章では、高岡城の起源と聚楽第・豊国社との関係を論じている。まず高岡の地名は越中射水郡の関野ヶ原に築城した高岡城に由来すること、美濃井ノ口稻葉山城を周王室発祥地になぞらえて岐阜城とした信長に倣ったことなどを指摘し、利長は織豊政権後継者としての意識が濃厚であったと述べている。

その証拠の一つは、高岡城が聚楽第型城郭として築かれたこと、すなわち慶長十年、利長は富山城の城郭構造を聚楽第型に修築したが、当城は同十四年三月十八日に焼失、その後、高岡城の築城となるが、その際、城郭構造や城内に「聚楽関白」と称した豊臣秀次の伏見遺館を移築したと説いている。また、秀吉の聚楽入第日と同じ九月十三日に利長が移徙するなど、高岡城は富山城以上に聚楽第のイメージが濃厚であると述べ、その理由は富山城が焼失した十八日は秀吉の月命日にあたり、その霊を神と祀る豊国神社の祭日と関係があると論じている。

第二章には、高岡築城の城内に利長が創祀した高岡稻荷大明神と聚楽第鎮守との相関性を述べている。慶長十四年から翌年にかけて高岡城下に農害が生じたのを憂慮した利長は、稻荷神の夢告により、自ら神体を刻して勧請したと伝えるが、これは豊穰を祈願するだけでなく城内鎮守の目的があったと論じている。つまり高岡城は聚楽第の後身としての趣が顕著であること、聚楽第にも稻

荷神が勧請されていたこと、さらには京都市内に鎮座の福長神社や出世稻荷神社にも類似した伝承があることを述べている。

また秀吉が稻荷神を篤く信仰したと述べ、その証左として伏見稻荷大社の社殿修復、楼門の造営、社領寄進などの史実を示し、さらに養女豪姫の狐憑の際に「狐狩り文書」の発給を願ったこと、大坂城に玉造稻荷、伏見城に満足稻荷を城内鎮守として勧請したことなどを掲げている。

このような観点からして、聚楽第鎮守が稻荷神であった可能性は極めて高く、これに倣った高岡城内にも稻荷神が勧請されたと述べ、高岡城内に同じく稻荷神を勧請したのは聚楽第の後身としてのイメージをいよいよ確かなものとするためであったと論じている。要するに、聚楽第の鎮守神と同じものを祀る事により、聚楽第は高岡城として北陸の地に復活したと述べ、それは稻荷神を篤く信仰した秀吉の「宗教行為の相伝」「祭祀の継承」でもあったと説いている。

第三章では、利長が慶長十五年に創始したとされる山車祭・高岡御車山祭の

起源を明らかにしている。その伝承と現行の祭礼行事を確認しながら、先行研究が触れなかった問題点を明確にしている。御車山祭は利長が、神明社（加久彌神社）と熊野社（関野神社）の祭礼として創始したと述べる、これら両社への崇敬は神宮式年遷宮を再興した信長と熊野那智大社を再興した豊臣家の信仰を相承したものと論じている。なかでも熊野信仰には織豊政権に関わった聖護院門跡の影響が窺えるとし、その祭礼の起源は「御所御車由緒之儀」などから、聚楽第行幸使用の御所車が秀吉から利家へ下賜され、これを利長が高岡開町へ授与し、それを京都祇園会のように山車に改造し、慶長十五年には加久彌・関野両社の春季祭に曳行させたことを明らかにしている。

また三月中旬の祭礼日は、利長の指示に従い山車を高岡城内に曳き入れたと伝え、高岡町民も御車山を尊重してきた事実は、御車山が「秀吉・前田親子所縁の御所車」であることの信憑性を補強するものと説き、これが利長によって創始されたことは史実であると考察している。

そして利長が山車祭を創始した理由を知るには「聚楽第行幸所縁の御所車」「祭礼創始期」「祇園会模倣」の三点を明らかにする必要があるので指摘し、以下にそれらの諸問題解決のための研究を展開している。

そこで第四章には、利長が御車山祭を創始し、それを壮麗にしていた理由を伝承と史実とを丹念に照合し、詳しい考証を行なっている。最初の「聚楽第行幸所縁の御所車」を城内に曳き入れさせたことには、聚楽第行幸の再現を意味するものがあると考察している。

次の「祭礼創始期」の問題は、この頃、秀吉十三回忌の豊国祭を一月後に控えた時期であり、それゆえ同年における御車山祭創始は秀吉への慰霊の意味があると述べ、さらには一年前の富山城炎上の不祥事を払拭する盛儀でもあり、さらに築城途上の高岡城とその鎮守の高岡稻荷大明神の殿宇の地鎮行事の意味合いをも有したと推定している。

最後の「祇園会模倣」の問題は、非業の死を遂げた高岡城殿閣旧主の秀次と

の関係が窺えると論じ、御車山は七台だが、『聚楽行幸記』に見る牛車は、秀吉の御所車の一台であり、史実と相違するが、実は、『義演准后日記』には、秀次も牛車を復興したとあり、これも前田家に下賜されたようであり、慶長十五年当時の高岡には農害が発生し、これを秀次の御霊の祟りと見た形跡があり、秀次の牛車を京都の祇園御霊会と同じく、山車として曳き廻す事で、秀次の霊を慰めようとしたと解している。

さらに御車山祭の壮麗化がなされた慶長十八年は、信長の三十三回忌の前年に当たること、つまり壮麗化は祇園神を崇め山車祭を好んだ信長への手向けの意味が認められると述べ、しかも御車山祭は豊臣政権大老の前田利長による豊臣の祭祀であり、さらには織田への祭祀でもあったと論じている。

第五章では、御車山祭の原型である築山神事に建てる築山の正体を解明し、あわせて築山神事が中絶された後の再興者が利長であった意義を考察している。まず築山は「蓬萊之山」とも称されたが、二段構造に主神と四天王を配す

るその形状は、明らかに須弥山であり、飛鳥の須弥山石の系譜を引くものと述べている。なお、この神事は大伴家持によって創始された可能性があること、さらに利長による慶長十五年の再興は、須弥山世界を具現化した安土城の影響によるもの、つまり安土山が蓬莱仙境のイメージとも混淆した結果とも考えられると述べている。

第六章では、利長菩提所の瑞龍寺と廟所の守護寺院の繁久寺に伽藍鎮守として稻荷神が祀られることに注目し、利長が高岡の各地に稻荷神を祀る意義について考察している。その代表的な一つは瑞龍寺で、当寺の前身である法円寺、これは金沢・七尾・越前・野田山それぞれの宝円寺の系譜を引く寺院であり、それら全てが前田家菩提所であること、そこに伽藍鎮守の稻荷神が祀られていることなどを指摘している。特に金沢の宝円寺の高徳稻荷は、秀吉・利家の出世を導いた守護神であり、故に瑞龍寺でも当初から稻荷神を祀っていたと考えられるが、『能登越中舊跡抄』には寛文期創建の同寺鎮守堂に稻荷神は確認出

来ないと記してあり、その理由は創建以前の承応二年、高岡城鎮守の高岡稲荷大明神は瑞龍寺と至近距離に鎮座しており、鎮守稲荷として機能したことによると推定している。

また利長廟所の鎮守寺院の繁久寺にも伽藍鎮守として稲荷神が祀られ、同寺は「高岡城内の聚楽第を移築した」との伝承があり、その茶室は「聚楽亭」「聚楽館」の名があるなど、利長と聚楽第との関係を知る上で興味深いと述べ、しかも、旧鎮守堂は同寺と廟所の中間にあり、廟所をも守護していたとも考えられると推察している。これらの事実からして、利長は死後も稲荷神に守護されるようにとの信仰をうかがうことができると述べている。

注目すべきは、利長が高岡稲荷大明神社内に神として合祀されたことで、その理由は『懐恵夜話』に記すように、服毒自殺と言う非業の死を遂げた事が大きく、これは「御霊稲荷」であると説いている。

要するに、利長の霊を合祀した稲荷神社を瑞龍寺の近くに遷座したのは、同

寺一帯を利長の慰霊空間にしようとの意図があったとも解されると述べ、さらに利長廟所を繁久寺鎮守稻荷が守護するのは、高尾稻荷に見るように、非業の死者の埋葬地に慰霊を目的とした稻荷神を祀る事と規を一にするものがあると解されると述べている。瑞龍・繁久両寺の鎮守神が稻荷である事は、秀吉・利家以来の稻荷信仰が反映されたものであり、親豊臣大名の前田家における稻荷信仰とその実態を俯瞰する上で、非常に重要な意義があると論じている。

つまり高岡において利長を稻荷神と共に祀る事の意義は、稻荷神のもつ御霊神としての性格、さらに利長が非業の死を遂げた事を知る上でも重要であると述べている。

越中高岡に残る神社縁起や祭礼伝承から、前田利長及び加賀前田家の神祇思想、そして神祇信仰には、織豊大名の特に豊臣政権大老としての意識が働いた事を解析している。なかでも高岡の神祇信仰には、羽柴肥前守を称し続けた利長の思いが今も息づいていると述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、織田大名（信長の女婿）から豊臣政権の大老となり、かつ加賀百万石の藩祖に転身して織豊・江戸初期の政局に画期的な役割を担った前田利長と、現代に繋がる越中高岡の神祇信仰について論じたものである。伝存する多くの、神社縁起や祭礼伝承の抜本的な見直しと博搜した資（史）料を批判的に駆使しての再検証により、既存の諸説を補訂しつつ独自の見解を打ち出している。その主旨は、高岡築城の由来や城郭の構造と様式、および城内鎮守や城下の主たる祭礼「御車山祭」の由来の何れもが、聚楽第（亭）や伏見城とその主である豊臣秀吉・秀次に帰結するとの立証を前提に、利長の高岡造営の狙いが豊臣政権の恒久的な顕彰と、非業の最期を遂げた関白秀次の慰霊にあったとする論述にある。

大名とその在所の信仰という、いわば地域を研究テーマとしながらも、一方

では、豊臣政権にも論及している。つまり豊臣政権の象徴ともいふべき聚楽第（亭）様式による高岡築城や、同政権の歴史的盛儀としての聚楽第行幸所縁の牛車に因むと類推される祭礼（御車山祭）の創始、伏見城内秀次旧邸の移築に関わる秀次慰霊のための稻荷神勧請という論点から知られるように、実質的には神祇信仰を視点とした新たな豊臣政権論ともいふべき側面を備えている。

しかしながら、研究対象は神祇のみならず、歴史や民俗にも及んでいる。すなわち「御車山祭」創始の謂れから式次第、山車の構造、および荘厳などに纏わる古来からの伝承や記録類を列挙し、研究史を踏まえつつ当代の編纂記録である『聚楽行幸記』や、『義演准后日記』『兼見卿記』ほかの古記録、前田利長書状などの古文書を駆使し、それらの是非を論じつつ事実関係を裏付けるといふ、実証的方法に根ざしたものであり、高く評価される。

全六章ともこの研究方法で貫かれており、その成果とするところは、第一章では、居城富山炎上に伴う新城地「高岡」の命名が岳父信長の「岐阜」命名の

嘉例に基づいたものと説くこと、この高岡新城の構造を聚楽第（亭）型としたばかりか、これへの移徙日も秀吉の聚楽入第日の嘉例に倣っている事実を検証し、隠居して後の利長が自ら大老として参画した豊臣政権の覇業伝承に意を注いでいたとの知見を得たことである。第二章では、利長による高岡城への稻荷（城内鎮守）勧請の由来と伝承を解析する一方で、これと秀吉の稻荷信仰に因む聚楽第（亭）鎮守との関わりを指摘し、それが農害に対する豊穰祈願ともする秀吉（豊臣政権）の祭祀の継承にあったとの見方を打ち出したこと。第三章では、御車山祭の淵源が秀吉から利家・利長父子に下賜された聚楽第行幸使用の御所車を改造した山車にあるとの説や、行事の子細を在地の伝承記録（「御所御車由緒之儀」ほか）で確認しつつ、新たに見出した史（資）料などを拠り所に、この祭礼に対する利長の意識の有り様を具体化したこと。第四章では、秀吉が使用し、秀次によってさらに追加建造された御所車の歴史的な存在形態とその意義を明らかにしつつ、これを引き継ぎ再現した利長の意向が織豊政権

の祭祀の継承に繋がっているとの所見が得られたこと。第五章では、御車山祭の基調をなす築山神事が、利長の手によって安土・桃山期の須弥山観を祖形として再興されたとの見方を具体化しえたこと。第六章では、利長に因む高岡城内外における稻荷神の奉祀とその信仰が、「無実」でありながらも切腹となった秀次の慰霊のためである反面、大坂夏の陣を前に「非業の最期」を遂げた利長自身の慰霊をも意味すると論じていることである。

さらに既存の史(資)料に新たに蒐集した史(資)料を加えた丹念な考証によって、利長の領国における祭祀と信仰の存在と形態を明らかにしている。また隠居事業とはいえ利長の高岡経営が、家康在世中の徳川政権初期という緊張した政局において、豊臣政権の覇業を顕彰しつつ、その犠牲となった秀次を慰霊する形で行われたとの論述は、これまで具体的にできなかった豊臣・徳川両政権の転換期における権力の興亡と神祇信仰の実態に言及し、その関わり様を明らかにしえた総合的かつ斬新な研究として評価できる。

しかしながら、聚楽第における稻荷神の所在や、「聚楽天主」（利長妹麻阿）の存在意義についてはさらに論を深める余地が残されている。また利長の「非業の死」をめぐるっては、一連の実弟利政書状に見える「腫物」の病との整合性を図る必要がある。なお、論者は本論文の出版を期して鋭意補訂に努めているという。今後の大成が期待できる。

以上の審査結果をもってすれば、本論文は十分に博士（神道学）の学位授与に相応しい資格を具有するものと認められる。

平成二十二年二月十八日

主査 國學院大學教授 三橋 健 (印)

副査 國學院大學教授 中西 正幸 (印)

副査 國學院大學兼任講師 宮本 義己 (印)